現代中国語における“给”構文研究ノート

張　仲　霏

1.“给”構文について

現代中国語における“给”にはいくつかの意味があるが、一番重要なのは「授与」(giving) の意味である。現代中国語の“给”によって「授与」を表す構文は“给”構文と呼ばれる。実際には、“给”が表しているのはすべて「授与」という意味ではなく、“给”構文は単一な文型ではない。例えば：

(1) 他给我一本书。

(彼は私に一冊の本を渡した。)

(2) 他送给我一本书。

(彼は私に一冊の本を送ってくれた。)

上の二つの文における“给”は述語の位置にあり、いずれも“给”構文と呼ぶことにする。

(3) 他送给我的那本书是一部词典。

(4) 那本书是他送给我的。

上の二つの文における“给”は主要述語の位置ではなく、基本的な“给”構文と呼ぶことができない。

1.1 “给”構文の文型

“给”構文には四つ文型がある、

S1. NPS＋给＋NP1＋NP2。

例：我给妹妹一本书。（私は妹に一冊の本をあげた。）

S2. NPS＋给＋NP1＋V＋NP2。

例：我给妹妹买了一本书。（私は妹に一冊の本を買ってあげた。）

S3. NPS＋V＋NP2＋给＋NP1。

例：我买了一本书给妹妹。（私は一冊の本を買って、妹にあげた。）

S4. NPS＋V＋给＋NP1＋NP2。

例：我送给妹妹一本书。（私は妹に一冊の本を贈った。）

1.1.1 文型 S1

文型 S1 は最も基本的な“给”構文である。“给”が表しているのは「授与」という意味であり、文の文型的な意味は「誰かがある物を他人にあげること」である。

論理的に分析すると、文型 S1 は次のように分析すればよいと考えられる。

我给妹妹一本书。

给’　（我，　妹妹，一本书）

アゲル　～ガ　～二　～ヲ

意味は：「私は妹に一冊の本をあげる」である。

この論理式では、第二項（NP1）と第三項（NP2）の順序を交換することができない。つまり、NP1 は人を指し、間接目的語と呼ばれる。NP2 は物を指し、直接目的語と呼ばれる。ここで注意すべきことは中国における、ある方言（湖北方言）では“给”構文の NP1 と NP2 の位

置が逆になることができる（魏兆惠 2004：9–10）。

「授与」とは「相手に何かを得ることをさせる」ということである。換言すれば、「授与」の動作を通して、相手に利益を受けさせる（be benefited）ことである。したがって、「授与」は通常積極的な意味を表す。しかしながら、「授与」で相手に損を受けさせる（be lost or harmed）場合もある。このような時、直接目的語として使われているのは形容詞の場合が多い。例えば、次の（5）では“打击”が、（6）では“厉害”が直接目的語になっている。

（5）父亲去世给了他一次沉重的打击。

（お父さんの逝去は彼にとって大きなショックだ。）

（6）应该给他点儿厉害。

（彼を少しこらしめてやろう。）

吕叔湘（1984：50–53）は「授与」が積極的な意味から消極的な意味に拡大するにつれて、動詞“给”の文法機能も拡大し、具体的な動作動詞として使用される用法も見られるということを述べている。例えば、

（7）给他两拳＝打他两拳。（彼に拳骨を二つ食らわせた。）

（8）给他两句＝说他两句。（彼を少ししかる。）

1.1.2 文型 S2

文型 S2 の文型意味は「相手に何かを得ることをさせる」から「相手に何かをする」になる。例えば“我给妹妹买了一本书”という文で、“买了一本书”は主語“我”が“给”の目的語“妹妹”に対して行った具体的な動作行為である。

文型 S2 における“给”について、多くの学者は“给”が前置詞だと考える。赵元任（1968：297）は「中国語における、ある他動詞が連動式となる最初の動詞とほかの位置における使用頻度は基本的に同じであ

る。したがって、他動詞を前置詞と見なすことができる」ということを述べている。具体的にいうと、“给”はもともと動詞であり、よく連動式の第一動詞として用いられているので、前置詞の資格を備えている。前置詞はそもそも動詞から発展しており、動詞の中の一つの類と考えうる。文型 S2 の“给”を動詞と見る学者は朱德熙（1979：3）である。

文型 S2 と文型 S1 の違いは文型 S2 における“给”が表している意味が比較的広いことである。つまり、「利益を受けさせること」、「損を受けさせること」、「利益或いは損を受けさせることと関係ないこと」を表すこともできる。例えば、

（9）我给妈妈买了件毛衣。（利益を受けさせる）

（私は母にセーターを買ってあげた。）

（10）那本书你给我弄脏了。（損を受けさせる）

（あなたはその本を汚してしまった。）

（11）昨天我给公司打了个电话。（利益或いは損を受けさせることと関係がない）

（昨日私は会社に電話をかけた。）

（12）老师给每个同学发了一张调查表。（利益或いは損を受けさせることと関係がない）

（先生は学生それぞれにアンケートを配った。）

以上の例から、文型 S2 における“给”も「授与」を表しているけれども、「授与物」は具体的に存在している事物ではなく、「主語 NPS が実施している動作」である。ここの文型 S2 における「V＋NP2」は“给”が V を形成した連動式である。

また、文型 S2 における“给”は二つの完全に対立していることを表すことができる。すなわち、「処置（dispose）」と「受身（passivity）」である。例えば、

（13）玻璃给我划破了。（“给”＝“把”、「処置」を表す）

（ガラスで私にひっかき傷ができた。）

（14）耗子给猫吃了。（“给”＝“被”、「受身」を表す）

（ネズミが猫に食べられた。）

ここで、注意すべきことは、NP1 と NP2 の位置を交換すれば、“给”の意味が変わることである。

（15）我给玻璃划破了。（“给”＝“被”、「受身」を表す）

（私はガラスでひっかかれた。）

（16）猫给耗子吃了。（“给”＝“把”、「処置」を表す）

（猫がネズミを食べた。）

しかしながら、次の文では、上のような現象が発生することはない。ここでは、“给”は“被”とも考えられるし、“把”とも考えられる。したがって、「あいまい性」がある文になる。

（17）我给他训了一顿。（“给”＝“被”＝“把”）

（私は彼をしかった。）

（私は彼にしかられた。）

以上の分析から、“给”構文の意味はたくさんの要素で決められることが分かる。

1.1.3 文型 S3

文型の形式から見ると、文型 S3“NPS＋V＋NP2＋给＋NP1”は S2“NPS＋给＋NP1＋V＋NP2”の変換された形式である。二つの文型の違いは“给＋NP1”が“V＋NP2”の前にあるか後ろにあるかである。次に、論理式で文型 S3 を分析して見よう。

我买了一本书给妹妹。

买’　（我，一本书）&　到’（一本书，妹妹）
カウ　～ガ　～ヲ　　至ル　～ガ　～二

この文の論理式は次のように解釈することができる。「私が本を買って、本が妹のところに至る」。この文にも二つ命題があって、“买’（我，一本书）”と“到’（书，妹妹）”である。この文と文型 S2 の違いは動作の優先順位で、つまり、文型 S2 の動作は「まず妹に何かをあげる」という考えと、「本を買う」という動作が同時に実現している。文型 S3 の動作は「本を買う」という動作が発生して、しかるのちに「妹にあげる」という動作が別々に実現した。したがって、文型 S2 と S3 には大きな差異があると認めることができる。

しかしながら、この“给”構文の“给＋NP1”の位置は自由に変えることができない。例えば、

（18）老板给我们发了工资。
　　（社長が私たちに給料を出した。）
（19）＊老板发了工资给我们。
　　（＊社長が給料を出して、私たちに与えた。）

文（18）は正しく、（19）は正しくない。したがって、文型 S2 と S3 は自由に転換することはできない。

1.1.4　文型 S4

文型 S1 と S4 の形式上の違いは“给”の前に「与える（hand over）」、「渡す（deliver）」などの意を表す動詞が来るということである。文型 S1、S2、S3 と比べて、S4 はやや複雑である。文型 S4 の意味は主語がまず「授与物」を準備しておいて、「授与」の動作を実行する。次に、例を挙げて分析しよう。

我送给妹妹一本书。（私は妹に一冊の本を贈った。）

トドケル　～ガ　～ヲ　　至ル　～ガ　～二

给’｛我，妹妹，送’（我，一本书）&　到’（书，妹妹）)｝

シテアゲル　～ガ　～二　　～コトヲ

この文の論理式は次のように解釈することができる。「私が妹に私が本をとどけて、本が妹のところに至るということをしてあげた」である。この文に、“我送书”と“书到（＝给）妹妹”の二つ命題が結びついて一つの複合命題になった。この二つ命題における“送”と“给”は両方とも動詞である。

一般的に、“V 给”についての分析は V と“给”を切り離して、“给”とその目的語 NP1 を一つのフレーズとして V の補語だと考える。例えば、

（20）我 ‖ 递〈给他〉一杯茶。

（21）他 ‖ 没找〈给我〉钱。

しかしながら、このような分析は合理的ではないと思われる。なぜならば、文型 S4 の「授与」の意味は動詞 V あるいは“给”だけで表せることではなく、動詞 V と“给”が組み合わさって、すなわち“V＋给”全体で「授与」という意味を表しているからだ。つまり、V が「授与」の行為を表し、“给”が「授与」の方向を表す。

このような、“V＋给”の用例はどこにでも見ることができる。口頭語では、“给”の読み方は弱くなり、前の動詞に付いて、“V＋给”全体が一つの複合動詞として使われているのである。そこで、前の文の“递给”と“找给”は皆複合動詞であり、後ろの“一杯茶”と“钱”はそれらの直接目的語だと考えられる。

（22）我 ‖ 递给他一杯茶。

（23）他 ‖ 没找给我钱。

1.2 “给”構文の項の省略

“给”構文において、項の省略には次のような場合がある。

1.2.1 文型 S1 の項の省略

文型 S1“NPS＋给＋NP1＋NP2”の項の省略については、NP2 を省略して、“NPS＋给＋NP1”になる場合が多く見られる。NP1 を省略する場合は少なく、日常会話にしか見られない。例えば、“你给他书了吗？”——“给书了”となる。

日常会話では NP1 と NP2 を同時に省略する方が自然だと考えられる。会話で省略された内容は会話の両者がよく知っているからである。前の質問“你给他书了吗？”には直接“给了”で答えれば済むのである。省略されている部分 NP1（他）と NP2（书）は会話の両者が知っているから、話さなくてもよいと考えられる。

1.2.2 文型 S2 の項の省略

文型 S2“NPS＋给＋NP1＋V＋NP2”の項の省略は、NP1 を省略して、“NPS＋给＋V＋NP2”になる。例えば、

（24）他给买了一个书包。（彼はかばんを買ってくれた。）

このような文は現代中国語にはよく見られるから、“NPS＋给＋V＋NP2”はよく使われている文型だと考えられる。

文型 S2 で NP2 を省略するのもよくあることである。つまり、“NPS＋给＋NP1＋V”になる。これも日常会話によく見られる。例えば、

（1）他给我修好了。（彼が直してくれた。）

1.2.3 文型 3 の項の省略

文型 3“NPS＋V＋NP2＋给＋NP1”の項の省略は、NP1 を省略することはできず、NP2 しか省略できない。NP1 を省略すると、不適格な文になるからである。例えば、

（26）＊他扔了个球给。

NP2 を省略すると、“他扔给我了”になる。このような省略は、文型 S2 における動詞の目的語の省略と似ている。つまり、“NPS＋V＋给＋NP1”になる。

1.2.4 文型 S4 の項の省略

文型 S4“NPS＋V＋给＋NP1＋NP2”も NP1 を省略できず、NP2 しか省略できない。なぜならば、NP1 がなくなると、「授与」という行為の対象がなくなり、不適格文になるならである。例えば、

（27）＊我寄给了两封信。

ところが、NP2 を省略すると、ただ「授与物」がなくなるだけである。実際の会話では、聞き手がコンテクストで「授与物」が何かが把握できるので、意味が伝わる。したがって、適格な文になる。例えば、

（28）我寄给他了。（私は彼に送った。）

2.“给”構文の先行研究の概要

2.1 “给”構文に関する共時的な研究

早期の“给”構文に関する研究はほとんど伝統的な文法を背景にしている。主に“给”の「文における性質や用法」の研究が多く、とりわけ“给”の性質についての研究が重視されている。

钟隆林（1959）は中国語における“给”は他動詞であり、動詞から発展した前置詞であると述べている。“给”の性質と用法に関する第一段階の研究を行った。20 世紀 60 年代から、構造主義分析方法の影響で、何人かの学者が記述方法を用いて現代中国語における“给”の用法を分析しようと試みた。杨欣安（1960）と向若（1960）は“给”の動詞、前置詞、助動詞としてのそれぞれの使い方を述べた。さらに、どのように“给”の性質を確定するかをも述べた。胡竹安（1960）は動詞の後に付く“给”が前置詞であるという観点を否定して、動詞の後に付く“给”と動詞を複合語（V 给）と見なしている。すなわち“给”は一つの語素であると述べている。

朱德熙（1979）は述語動詞“给”で構成された「授与」構文の構造的意味、文法関係及び「授与」の概念などを全面的に論じた。その後、马庆株（1983）、范晓（1986）、李炜（1995）、张伯江（1999）、张国宪（2001）、延俊荣（2005）など多くの学者が違う角度から「授与」構文を研究した。

20 世紀 80 年代、中国語文法の研究者が外国の言語学理論を受けいれ始めたために、中国語文法の研究が新しい段階に推し進められた。生成文法、格文法、結合価文法などの理論が“给”の研究に新しい研究方法を提供した。齐沪扬（1995）は格文法の角度から、前置詞の“给”が表している格関係について研究を行った。周长银（2000）と满在江（2003）は生成文法理論を用いて、「授与」類二重目的語構造を研究した。杨宁（1986）、范晓（1986）、周国光（1993）、张国宪（1998）などの学者は結合価分析方法で“给”構文を分析した。

90 年代以来、中国語の文法学者は“给”の意味に関する研究をはじめた。周国光（1995）は人類心理学で“给”の意味の発展過程を説明した。沈家煊（1999）と张伯江（1999）は“给”構文の文型の意味を分析した。また、以前あまり注意されていなかった“给＋V”構造が“给”

構文についての新しい研究方向になった。王彦杰（2001）、张谊生（2002）と李炜（2004）は“给＋V”における“给”の出所についての研究をした。

要するに、今までの“给”と“给”構文に関する研究は、研究角度からも、研究方法からも、すべて“给”の研究に積極的な貢献をしたと言える。次に具体的に今までの“给”についての研究を紹介しよう。

2.1.1 “给”の文法意味についての研究

“给”の文法的意味についての研究はずっと研究の重点である。向若（1960）、杨欣安（1960）、胡竹安（1960）が相次いで『中国语文』に掲載された。これらの論文は“给”の性質と用法などの基礎的な研究を行った。ここから、中国国内での“给”に関する研究が正式に始まったと言える。

朱德熙（1979）は動詞“给”で作った三類の文型（“我送给他一本书”，“我送一本书给他”，“我给他写封信”）及びこの三類の文型と深い関連がある二重目的語文型（“我送他一本书”）を紹介して、動詞を三類に分けた。つまり「授与」を表す動詞（卖、送）、「取得」を表す動詞（买、娶）と「授与」でもなく、「取得」でもない動詞（画、炒）である。朱德熙（1983）は“给”で構成された四類の複雑な文型を検討した。この二論文は今日までの“给”の研究において重要な役割を果している。

“给”の統語的意味についての研究もたくさんある。龚千炎（1983）、赵金铭（1992）、佐佐木勋人（2002）、周长银（2000）、李晋霞（2003）などがある。

他に、祝顺（1983：8）は同形取り代えの方法で“给”の類型を分析した。周国光（1993）と谢凤萍（1998）は結合価の分析方法で“给”を分析して、動詞の“给”の語彙意味と文法意味の発展を記述した。李炜

（1995）は“给”の文法意味を記述した。齐沪扬（1995）は格文法で“给”が表している格関係を検討した。朱斌（1998）は“给”が名詞性目的語あるいは動詞性目的語と一緒に使われる場合にそれぞれのルールを検討した。沈家煊（1999）は“给”構文を例として、「基本的な認知原則から全文の意味を確認できる」という結論を下した。王彦杰（2001）は“把……给 V”構文を分析して、助動詞の“给”の使用条件を分析した。刘永耕（2005）は動詞の“给”の文法化過程を検討した。

2.1.2 方言における“给”の研究

“给”は方言における使用方法が多様であり、方言における“给”に関する研究も少なくない。李炜（1987）は蘭州方言の“给 1＋NP＋给 2＋给 3”構文における“给 1”、“给 2”と“给 3”それぞれの性質と用法を分析した。徐丹（1992）は北京語における“把／被”と関係がある“给”構文を検討した。唐玉环（2000）は普通話との比較を通して、石門方言における“把”、“给”、“让”の意味と用法、主に普通話との異なるところを重点として分析した。周磊（2002）は乌鲁木齐方言における“给”、動詞“给给”、前置詞“给”及び動詞あるいは前置詞と連用する“给”の否定用法を検討した。凌云国（2002）は走馬方言における“给と“拿给”それぞれの意味と用法を分析し、“给”が「授与」から「受身」という意味に派生する可能性を推測した。沈明（2002）は太原方言における動詞の“给”、前置詞の“给”と助動詞の“给”の用法を記述し、太原方言における“给”構文の三種の文型とそのそれぞれの違いを詳しく検討した。王廷贤（2003）は天水方言における“给”の特別な文法意味、用法及び“给”構文の特徴を紹介した。魏兆惠（2004）は普通話では「処置」という意味を表す“把”構文を使うけれども、襄樊方言でも二類の構文が「処置」という意味を表すことができるとし、“给”

構文と“叫”構文を紹介した。論文ではこの二類の［処置］構文の出所を分析した上で、普通話における「処置」構文と比較した。张恒（2007）は開封方言における“给”の性質、機能及び“给”構文の特徴を詳細に記述した。王东（2008）は羅山方言における“给给”の使用環境を詳しく検討した。申向阳（2008）は“把”と“给”の使用条件及び文脈を記述して、九寨沟方言の文法的な特徴をまとめた。

また普通話における“给”と方言における“给”の対照研究もある。巢宗祺（1999）と（2000）は粤闽湘赣客家などの方言資料に基づいて、普通話の“给”、“和”と対応する方言語彙の分布状況を検討した。

2.2 “给”構文に関する通時的な研究

2.2.1 “给”の由来について

太田辰夫（1957）は“给”の由来を検討した。张惠英（1989）は“给”と“乞”の関係を検討して、“给”が“乞”の代用字であり、“乞”の「授与」と「受身」の用法を受けついだという結論を出した。さらに、動詞以外に、ほかの性質を持って使われる“给”の方法を分析した。志村良治（1995）は“与”、“馈”、“给”の由来を検討して、“给”が“馈”から派生したという結論を出した。赵世举（2003）は授与類動詞が先秦時代に生まれ、漢魏時代に成長して、隋唐時代に成熟したという結論を出した。

2.2.2 “与”と“给”の取り替えについて

李宗江（1996）は多くの場合“与”が単独で「授与」という意味を表せないので、最終的に“给”に譲ったと記述した。

2.2.3 “给”の表す意味の研究について

李炜（2002）は清中葉以来の七類の北京のローカル色の濃い作品と三類の南方官話のローカル色の濃い作品を対照して、“给与”を表す単語は南方官話の作品では「使役」を表す場合が多く、北京語にはそのような用法は珍しいという結論を出した。李炜（2004）は「処置」或いは「受身」を表す“给”が文法的にほぼ同じで、文の「処置」或いは「受身」の語気を強めるという役割をするとまとめた。李炜（2004）は“给”が90年代になって「受身」を表すことがやっとできるようになったということをまとめて、そうなった原因も検討した。

2.2.4 “给”の文法化について

蒋绍愚（2002）は“给”が表す意味の発展過程を次のように述べた。“给”の意味上の発展はまず“给”が「授与」しか表さず、後に「使役」を表すことができるようになり、最後に「受身」を表すことができるようになったという観点を記述した。

石毓智（2004）は『红楼梦』を対象として、“给”の「受身」と「処置」という二つ用法が形成された意味的基礎と統語的環境を検討した。

王健（2004）は「処置」を表す“给”の由来を検討した。“给”の文法化過程において、“给”の統語的な位置の変化と各位置に置かれる“给”の意味の変化にしたがって、“给”の機能が拡大されたという結論を出した。

洪波（2004）は清代初期以前に生まれた虚詞として使われる“给”は“与”と関係があり、清代中葉以来の「使役」と［受身］の用法は“给”自身の文法化によっており、清代末期の「使役」の“给”が生まれた原因も“给”自身の文法化によるとしている。洪波は更に、“给”の由来についても研究をした。

3 “给”の性質に関する研究概要

3.1 動詞として使われる“给”

動詞“给”に関する研究は、ほとんど「授与」類動詞の分類或いは“给”構文に内在するルールについての研究である。朱德熙（1979）は動詞“给”で構成された三種の文型を検討した。

S1. NPS＋给＋NP1＋NP2。

例：我给妹妹一本书。（私は妹に一冊の本をあげた。）

S2. NPS＋给＋NP1＋V＋NP2。

例：我给妹妹买了一本书。（私は妹に一冊の本を買ってあげた。）

S3. NPS＋V＋NP2＋给＋NP1。

例：我买了一本书给妹妹。（私は一冊の本を買って、妹にあげた。）

朱先生によると、この三つの文における“给”はすべて動詞であり、NP1 と NP2 は体詞性成分を表すとしている。朱先生はさらに各文型に用いられる動詞を分類した。李炜（1995）、袁明军（1997）などの学者も類似した分析をした。呂叔湘（1980）は動詞“给”について三種の意味をまとめた。それは「1）相手に何かを得ることをさせる、2）許容、3）相手に損を受けることをさせる」である。呂先生の研究はすでに動詞“给”が「授与」と「使役」の二つ文法意味を含んでいるという内容に触れている。周国光（1993）は動詞“给”を次の二種類に分けた。1）给 1。「授与」を表す“给 1”は「授与する」（willing to give）の意味があり、それと「交付する」、「渡す」など授与類動詞も関係がある。2）给 2。「許可」を表す“给 2”は「許可」或いは「させる」などの意味と関係がある。周国光（1995）は子供を対象として、動詞“给”の語彙的意味のマスター過程を研究して、次の結論を出した。1）動詞の習得は

子供の認知レベルを基礎にする。2）動詞の語彙的意味の発展は「動詞の意味の全体を理解する程度」及び「動詞の意味の理解の豊富さ」に表われている。彼の研究により、動詞“给”の意味の発展過程についての理解が深まったと言える。

3.2　前置詞として使われる“给”

前置詞として使われる“给”は多くの意味を表している。呂叔湘（1980）の研究によると、前置詞“给”は経験者格補語、動作主補語などを導くことができる。赵元任（1968）、齐沪扬（1995）、袁明军（1997）などの学者は前置詞を次の三類に分けた。1）授与の対象を導く、2）受け手を導く、3）動作主を導くである。范晓（1987）は“给”の意味を七類に分けた。それは「物を受ける」、「利益を受ける」、「損を受ける」、「向きを導く」、「対象を導く」、「動作主を導く」と「受け手を導く」である。この七類の意味には共通点がある。つまり、「動作と関係がある対象を明らかにする」ということだ。“给 N”は必ず具体的なフレーズあるいは文に置かれて意味が分かる。なぜならば、同じ“给 N”が同じ動詞の前に出現しても意味が違う場合があるからである。

齐沪扬（1995）は格文法の角度から前置詞として使われる“给”の格関係、“给”の特殊性を検討した。具体的に言えば、多くの場合に、前置詞“给”の後の名詞性成分は省略することができない。しかしながら、絶対に省略することができないとも言えない。例えば“我给这事忘了。”“我给忘了。”と言える。齐先生によると、このような文で名詞性成分を省略することができる理由は“给”が「動作主」と「受け手」という二つの関係を持つからである。前置詞“给”は「動作主」と［受け手］を両方とも導くことができ、それぞれ“被、把”に相当する。例えば、

衣服<u>给</u>雨淋湿了。（動作主を導く、“被”に相当する）

你给房间扫一扫。（受け手を導く、“把”に相当する）

“给”の“被”として使われる用法については、多くの学者、太田辰夫（1957）、橋本万太郎（1987）、袁家骅（1983）なども論じたことがある。“给”が“把”として使われる用法については、赵元任（1968）と朱德熙（1982）を除いて、他の学者の研究をあまり見たことがない。

蒋绍愚（2001）は文法化の角度から“给”を研究した。主に、“给”が「動作主」と「受け手」をともに導くことができる理由と背景を検討した。彼の研究によると、“给”の「受身」を表す過程は「授与」の意味から“叫、让”になり、そして“被”になるということだ。更に、このようになるのは文の変化につれて、“给”の意味と機能も変化するからだと論じた。

3.3　助動詞として使われる“给”

“给”の性質、特に“给 V”における“给”の性質に関しては、二つの違う観点がある。助動詞（向若 1960）と前置詞（齐沪扬 1995）である。助動詞であろうと、前置詞であろうと、この“给”にはひとつの特徴がある。あってもなくても文の意味は同じということだ。“给”の役割は語気を強めることである。

张谊生（2000）は助動詞として使われる“给”の統語的な性質と機能について検討した。“为”構文、“被”構文と“把”構文における“给 V”の意味と特徴を分析した上で、“为”構文の“给”と“被”構文、“把”構文の“给”は表面から見れば、すべて“给 V”構造であるけれども、文中のレベルが違うという事実を指摘した。具体的に言うと、“为”構文の“给”は前置詞“给”の支配する成分が省略された後に形成されたのである。“被”構文と“把”構文の“给”は“给”の支配する成分が前に移動された後に形成されて、文には別の前置詞も存在する

ということである。“为”構文の“给”は簡潔性のために使われるものであり、“被”構文と“把”構文の“给”は語気を強めるために使われるものである。これに対して、李纳（1984）と汤普逊（1984）も同じような観点を持っている。

王彦杰（2001）は“把……给 V”を分析して、“把”構文における“给”の使用条件と機能を検討した。また“给”の使用条件は、1）文の意味の中心はある結果を表し、話者が「結果が意外であった」という意味を含めている。2）話題を終わらせる。“给”を用いない“把”構文も研究した。1）動作情態類“把”構文、2）話者が「結果について想像もできない」という意味を含めない“把”構文、3）連動式の後に後続成分を使用している“把”構文。

李炜（2004）は“N 受 N 施给 VP”構文における助動詞“给”を分析した。更に、“给”の意味上の特徴と文中で演じる役割を検討した。

3.4 “给”の性質に関する異議

“给”の性質に関して、学者の意見が異なる場合がよく見られる。具体的に言うと、

1）“给＋NP＋NP”における“给”

朱德熙（1979）は“大夫给病人打针”と“我给妹妹买了一辆车”の“给”はどちらも動詞であると記述しているけれども、齐沪扬（1995）はこの観点を認めない。“我给妹妹买了一辆车”の“给”は前置詞であると論じている。齐先生は李纳（1983）が提出した“给”を前置詞と考え、意味上は、動詞“给”と緊密な関係があるという観点をとる。この“给”が前置詞である原因は、この“给”が動詞の意味をなくし、ただ「対象」を紹介する役割だけを持つことから、前置詞だと見なすべきだと論じた。

2）“V＋给”における“给”

“给”の性質に対する異議はほとんど動詞の後の“给”についてである。前置詞と見なす学者もいるし、動詞と見なす学者もいる、また動詞の一つ語素と見なす学者もいる。

前置詞と考えるのは次の学者である。钟隆林（1960）は“V＋给”における“给”は後置前置詞だと考える。李炜（1994）の観点によると、動詞の後の“给”は動詞と結びついて、分離できないものになっている。読みは軽声である。“了”を使うと、“V＋给”の後にしか使えないという性質があり、実詞ではないことから、前置詞と考える。したがって、“V＋给”全体が一単語の機能を表すと考えた。

語素と考えるのは次の学者である。胡竹安（1960）は“教给、带给”などフレーズを分析対象として、それぞれの形態の変化、読み方、文中の位置、歴史上の変化などの面から分析して、結論を出した。この“给”は前置詞ではなく、複合語の一つ語素だと記述した。杨欣安（1960）も類似の観点を持っている。“V＋给”は全体で一単語であり、したがって“给”は前置詞だと見なし、“给”は語素であるとも記述した。

助動詞と考える学者向若（1960）は“V＋给”における“给”が動詞の前に置いても、後においても、助動詞であると述べている。

3）“给＋V”における“给”

“给”を前置詞と考える钟隆林（1959）は“给＋V”における“给”が動詞の前に置いても、後においても、前置詞であると述べている。齐沪扬（1995）はこの“给”が支配する成分が省略されたと見なし、当然典型的な前置詞であると記述している。

助動詞と考える王彦杰（2001）、张谊生（2002）、李炜（2004）などの学者はこの“给”は「処置」と「受身」を強めるという役割があり、省

略できる助動詞だと考えている。

参考文献：

[1] 魏兆惠 2004《襄樊方言特殊的处置式——“给”字句和“叫”字句》,《湖北教育学院学报》第 21 卷第 4 期，9–10 页。

[2] 吕叔湘 1984《汉语语法分析问题》,《汉语语法论文集》北京：商务印书馆，50–53 页。

[3] 赵元任 1968《汉语口语语法》，吕叔湘译，北京：商务印书馆，297 页。

[4] 钟隆林 1959《略论现代汉语中的“给”字》，武汉大学学报（人文科学版），第 10 期，8–9 页。

[5] 杨欣安 1960《说“给”》,《中国语文》第 2 期，66–68 页。

[6] 向若 1960《关于“给”的词性》,《中国语文》第 2 期，64–65 页。

[7] 胡竹安 1960《动词后的“给”的词性和双宾语问题》,《中国语文》第 2 期，66–68 页。

[8] 朱德熙 1979《与动词“给”相关的句法问题》,《方言》第 2 期，1–3 页。

[9] 马庆株 1983《现代汉语的双宾语构造》,《语言学论丛》第 10 辑，166–196 页。

[10] 范晓 1986《交接动词及其构成的句式》,《语言教学与研究》第 3 期，19–34 页。

[11] 李炜 1995《句子给予义的表达》,《中山大学学报》（社会科学版）第 2 期，125–132 页。

—— 2004《加强处置／被动语势的助词“给”》,《语言教学与研究》，第 1 期，55–61 页。

—— 1987《兰州方言给予句中的“给”——兼谈句子给予义的表达》,《兰州大学学报》第 3 期，18–20 页。

—— 2002《清中叶以来使役“给”的历时考察与分析》,《中山大学学报》第 3 期，62–66 页。

—— 2004《清中叶以来北京话的被动“给”及其相关问题——兼及“南方官话”的被动“给”》,《中山大学学报》第 3 期，35–40 页。

[12] 张伯江 1999《现代汉语的双及物结构式》,《中国语文》第 3 期，175–184 页。

[13] 张国宪 2001《制约夺事成份句位实现的语义因素》,《中国语文》第 6 期，85–91 页。

[14] 延俊荣 2005《“给予”双宾式和与格式共存的动因》,《语文研究》第 4 期，2–7 页。

[15] 齐沪扬 1995《有关介词“给”的支配成份省略的问题》,《上海师范大学学报》第 4 期，87–93 页。

[16] 周长银 2000《现代汉语“给”字句的生成句法研究》,《当代语言学》第 3 期，155–167 页。

[17] 满在江 2003《生成语法理论与汉语双宾语结构》,《现代外语》第 3 期，232–240 页。

[18] 杨宁 1986《三价动词及其巨型》，复旦大学硕士论文。

[19] 周国光 1993《动词“给”的配价功能及其相关句式发展状况的考察》,《南京师大学报》第 1

期，21-25 页。

[20] 沈家煊 1999a《不对称和标记论》，南昌：江西教育出版社，80-247 页。

——— 1999b《“在”字句和“给”字句》，《中国语文》第 2 期，94-102 页。

[21] 王彦杰 2001《“把……给 V”句式中助词“给”的使用条件和表达功能》，《语言教学与研究》第 2 期，64-70 页。

[22] 张谊生 2002《助词与相关格式》安徽教育出版社，29-106 页。

[23] 龚千炎 1983《由“V 给”引起的兼语句及其变化》，《中国语文》，第 4 期，241-243 页。

[24] 赵金铭 1992《“我唱给你听”及相关句式》，《中国语文》，第 1 期，7-9 页。

[25] 佐佐木勋人 2002《由给予动词构成的处置句》，《语言教学与研究》，第 5 期，235-245 页。

[26] 李晋霞 2003《论表处置的“给”字句》，现代汉语虚词与对外汉语教学学术研讨会会议论文，上海师范大学。

[27] 谢凤萍 1998《给予动词的配价研究》，《安徽师范大学学报》（人文社会科学版）第 1 期，35-38 页。

[28] 朱斌 1998《真准谓宾动词》，《汉语学习》第 6 期，28-32 页。

[29] 刘永耕 2005《动词“给”语法化过程的义素传承及相关问题》，《中国语文》第 2 期，130-132 页。

[30] 丁崇明 1992《大理方言中与动词“给”相关的句式》，《中国语文》第 1 期，60-62 页。

[31] 徐丹 1992《北京话中的语法标记词“给”》，《方言》第 1 期，9-11 页。

[32] 唐玉环 2000《石门方言中的“把”、“给”、“让”》，《娄底师专学报》第 1 期，17-19 页。

[33] 周磊 2002《乌鲁木齐话“给”字句研究》，《方言》第 1 期，2-5 页。

[34] 凌云国 2002《双峰县走马话中的“给”》，《湖南省政法管理干部学院学报》第 1 期，37-38 页。

[35] 沈明 2002《太原话的“给”字句》，《方言》第 2 期，1-3 页。

[36] 王廷贤 2003《天水话里的“给”字句》，《天水行政学院学报》第 5 期，13-14 页。

[37] 魏兆惠 2004《襄樊方言特殊的处置式——“给”字句和“叫”字句》，《湖北教育学院学报》第 4 期，2-5 页。

[38] 巢宗祺 1999《吴语里与普通话“给”相对应的词》，《华东师范大学学报》第 5 期，12-14 页。

——— 2000《粤闽湘赣客家等方言及书面材料中和普通话“给”“和”相对应的词》，《华东师范大学学报》第 4 期，16-18 页。

[39] 太田辰夫 1957《说“给”》，《语法论集》第 2 集，北京：中华书局，127-143 页。

[40] 志村良治 1995《“与”、“馈”、“给”——从中古到近代的汉语授予动词的历史变迁和“给”

的北京音的来源》，《中国中世语法史研究》，北京：中华书局，248-260 页。

[41] 张惠英 1989《说“给”和“乞”》，《中国语文》第 5 期，378 页。

[42] 赵世举 2003《授与动词“给”的产生与发展简论》，《语言研究》第 4 期，53-55 页。

[43] 李宗江 1996《红楼梦中的“与”和“给”》，北京：北京语言学院出版社，289-310 页。

[44] 蒋绍愚 2002《“给”字句、“教”字句表被动的来源——兼谈语法化、类推和功能扩展》，《语言学论丛》第 26 辑，168-182 页。

[45] 石毓智 2004《兼表被动和处置的“给”的语法》，《世界汉语教学》第 3 期，2-5 页。

[46] 祝顺 1983《说“给”》，《华中师范大学学报》第 4 期，8-10 页。

[47] 王健 2004《“给”字句表处置的来源》，《语文研究》第 4 期，1-3 页。

[48] 洪波 2004《“给”字的语法化》，《南开语言学刊》第 2 期，18-21 页。

[49] 袁明军 1997《与“给”字句相关的句法语义问题》，《语言研究论丛》第 7 辑，北京：语文出版社，34-40 页。

[50] 吕叔湘 1980《现代汉语八百词》，北京：商务印书馆。

[51] 丛琳 2001《“给+NP”中 NP 的语义范畴》，《北京教育学院学报》第 3 期，2-4 页。

[52] 范晓 1987《介词短语“给 N”的语法意义》，《汉语学习》第 4 期，8-12 页。

[53] 陈昌来 2002《现代汉语介词的内部差异及其影响》，《上海师范大学学报》第 5 期，15-18 页。

[54] 桥本万太郎 1987《汉语被动式的历史、区域发展》，《中国语文》第 1 期，36-37 页。

[55] 袁家骅 1983《汉语方言概要》，文字改革出版社，143-180 页。

[56] 张谊生 2000《现代汉语副词研究》，上海：学林出版社。

[57] 张恒 2007《开封话的“给”与“给”字句》，河南大学硕士论文。

[58] 王东 2008《河南罗山方言的“给给”》，《语文研究》第 2 期，58-61 页。

[59] 申向阳 2008《九寨沟方言“把”字句和“给”字句研究》，《河坝师范高等专科学校学报》第 1 期，78-81 页。

[60] 李纳 汤普逊 1984《“被”字结构》，《湖州师范学院学报》第 2 期。